

地方と中央

— 『太平記』卷十一の構成と展開 —

谷 垣 伊 太 雄

一

卷九・卷十で、京都・鎌倉における北条氏の滅亡を記した『太平記』は、卷十一では、代わるべき主役としての先帝(注)後醍醐天皇が「主上」として京都に還幸する経過を語りつつ、卷九・卷十で採り上げなかった地方の動静をも描く。その章立ては次の通りである。(注2)

- 一、五大院右衛門宗繁・相摸太郎事
- 二、諸將被進早馬於船上事
- 三、書寫山行幸事付新田注進事
- 四、正成參兵庫事付還幸事
- 五、筑紫合戦事
- 六、長門探題降参事

七、越前牛原地頭自害事

八、越中守護自害事付怨靈事

九、金剛山寄手等被誅事付佐介貞俊事

第一章では、まず、新田義貞による鎌倉制圧(卷十)後の「平氏ノ一族達」の悲劇的狀況が概観される。その上で「中ニモ」として、卷第十三章でその動静が諏訪盛高の口から語られた「萬壽」(北条高時の嫡子・相模太郎邦時)の事について詳述される。北条高時に「此邦時ヲバ汝ニ預置ゾ、如何ナル方便ヲモ廻シ、是ヲ隠シ置キ、時到期リヌト見ヘバ、取立テ亡魂ノ恨ヲ可謝」として、邦時(五大院右衛門ガ妹ノ腹ニ出来タル子)を託された五大院右衛門尉宗繁は、「仔細候ハジ」と承諾して「鎌倉ノ合戦ノ最中ニ、降人ニ」なっていた。ところが「二三日ヲ經テ後、平氏悉滅ビ」北条一族への追求の手が伸びて来たため、「イヤ〜果報盡ハテタル人ヲ扶持セン

トテ適遁得タル命ヲ失ハンヨリハ、此人ノ在所ヲ知タル由、源氏ノ兵ニ告テ、貳ロナキ所ヲ顯シ、所領ノ一所ヲモ安堵セバヤ」と考え、邦時に対して、船田入道（新田義貞の執事）が押し寄せると偽り「夜ニ紛レテ、急ギ伊豆ノ御山ノ方ヘ落サセ給候ヘ」と「誠シ顔ニ成テ」告げる。その言葉を信じて「五月二十七日ノ夜半計ニ、忍テ鎌倉ヲ落」ちていく相模太郎邦時の姿については、「ソコ共不知、泣々伊豆ノ御山ヲ尋テ、足ニ任テ行給ヒケル、心ノ中コソ哀ナレ」と描かれる。

宗繁の密告を「心中ニハ悪キ者ノ云様哉ト乍思」聞いた船田入道は、「先子細非ジ、ト約束シ」た上で「五月二十八日明ボノニ、淺猿ゲナル寢レ姿」で相模河を渡ろうとしていた邦時を捕え、「翌日ノ暁、潛ニ首ヲ刎」ねた。

一方、宗繁に関しては「欲心ニ義ヲ忘レタル五大院右衛門ガ心ノ程、希有也、不道也ト、見ル人毎ニ爪彈ヲシテ惡シカバ」として、新田義貞も宗繁の処罰を秘かに決定する。その事を察知した宗繁は、身を隠したものの「遂ニ乞食ノ如ニ成果テ、道路ノ街ニシテ、飢死ニケルトゾ聞ヘシ」と記される。

第二章は、五月十二日に、千種忠顕・足利高氏・赤松円心から、六波羅没落の報が次々と船上に届いたとの記述から始まる。還幸に関して諸卿僉議が開かれ、勘解由次官藤原光守が「暫ク只皇居ヲ被レ移候ハデ、諸國ヘ綸旨ヲ被ニ成下、東國ノ變違ヲ可レ被レ御覽ニゼヤ候ラン」と「諫言ヲ以テ」述べ、「當座ノ諸卿」もこれに賛同し

た。しかし、「主上」（後醍醐帝）は「自周易ヲ披カセ給テ、還幸ノ吉凶ヲ」占ない、還幸を決断する。

同二十三日に船上山を出立した還幸の行列は、衣冠姿の行房・光守を除けば、武装集団に警護されたものであった。

第三章・第四章で、還京までの経過が述べられる。第二章に「腰興ヲ山陰ノ東ニゾ被レ催ケル」とあったが、第三章では「五月二十七日ニハ、播磨國書寫山ヘ行幸」とあるので、伯耆国から列島を横断するコースを辿ったことになる。書写山田教寺の宿老の口から性空上人の故事・寺仏の由来などが語られ、「主上」が「不レ斜信心ヲ傾サセ給テ」「當國ノ安室郷」を「不斷如法經ノ料所」として寄進した事が記され、「今ニ至マデ、其妙行片時モ懈ル事無シテ、如法如説ノ勤行タリ。誠ニ滅罪生善ノ御願難レ有カリシ事共也」と付記される。

以下、「二十八日ニ法華山ヘ行幸」し、「晦日ハ兵庫ノ福嚴寺ト云寺ニ、儲卿ノ在所ヲ點ジテ、且ク御坐有ケル處ニ、其日赤松入道父子四人、五百餘騎ヲ率シテ参向」したこと、そして「其日ノ午刻ニ新田義貞から「相模入道以下ノ一族從類等、不日ニ追討シテ、東國已ニ靜謐」との報告が届き、「主上ヲ始進セテ、諸卿一同ニ猶預ノ宸襟ヲ休メ、欣悅称嘆ヲ被レ盡」た事が短く記される。

第四章では、「兵庫ニ一日御逗留有テ、六月二日被レ回レ瑤興ニ處ニ」楠正成が七千余騎で参向し、還幸の先陣を務めたこと、「六月五日

ノ暮程ニ、東寺マデ臨幸」なつたこと、「翌日六月六日、東寺ヨリ二條ノ内裏へ還幸」なつたことが簡潔に記される。六日には、「臨時ノ宣下」があつて、足利高氏は治部卿に、直義は左馬頭に任命され、二人は、帯刀の武士五百人を随えた千種忠顕が鳳輦の前に供奉する行列の後方に付き従つた。「百司ノ守衛嚴重」な行列を見物する貴賤は「岐ニ滿テ、只帝徳ヲ頌シ奉聲、洋々トシテ耳ニ盈リ」という有様であつた。

第五章では、「京都・鎌倉ハ、已ニ高氏・義貞ノ武功ニ依テ靜謐シヌ。今ハ筑紫ヘ討手ヲ被_レ下テ、九國ノ探題英時ヲ可_レ被_レ責」として、二条師基を太宰帥に任命し派遣直前の六月七日、「菊池・小貳・大伴ガ許ヨリ、早馬同時ニ京着シテ、九州ノ朝敵無_レ所殘、退治候ヌト奏聞」した事が略述された後、時間を溯行させ、「其合戰ノ次第ヲ、後ニ委ク尋ヌレバ」という形で、九州平定の経過が詳述される。

「主上未ダ舟上ニ御座有シ時、小貳入道妙慧・大伴入道具簡・菊池入道寂阿、三人同心シテ、御方ニ可_レ參由ヲ申入」れたため、「繪旨ニ錦ノ御旗ヲ副テ」下賜された。その事を知つた探題北条英時が「彼等ガ野心ノ實否ヲ能ク伺ヒ見シ爲ニ」まず菊池寂阿を博多へ呼び出したところ、菊池は「隱謀露顯シテ、我等ヲ討シ爲ニソ呼給フ覽」と判断、「勝負ヲ決セン」と考へて、小貳・大友に連絡をとつた。ところが、大友は「天下ノ落居未ダ如何ナルベシトモ見定メザリ」とのこととで「分明ノ返事」をしなかつた。小貳は「其比京

都ノ合戰ニ、六波羅毎度勝ニ乘」と聞き、「日來ノ約ヲ變ジテ」菊池からの使者を斬り、その首を探題に差し出した。激怒した菊池は「元弘三年三月十三日ノ卯刻ニ、僅ニ二百五十騎ニテ」探題の館へ押し寄せた。しかし、「櫛田ノ宮ノ前」を通り過ぎようとした菊池の馬が「俄ニスクミテ」一歩も進まなくなつた。菊池は「大ニ腹ヲ立テ」「上差ノ鎗ヲ抜き出シ、神殿ノ扉ヲ二矢マデ」射た。すると馬の立ちすくみがなつたので「サゾトヨ、トアザ笑テ」通過した。

やがて、菊池は探題英時を自害寸前にまで追いつめたが、「小貳・大友六千餘騎ニテ、後攻」をしているのを見て、討死を決意し、嫡子の肥後守武重に「汝ハ急我館ヘ歸テ、城ヲ堅シ兵ヲ起シテ、我が生前ノ恨ヲ死後ニ報ゼヨ」と告げ、行動をともしようとする武重を諭して、「若黨五十餘騎」とともに肥後へ帰国させる。結局、菊池入道寂阿は「二男肥後三郎ト相共ニ、百餘騎」で、探題の館に攻め入つて討死をした。この寂阿の死は、櫛田宮前での変事を語る場面で「軍ノ凶ヲ被_レ示ケン。又乗打ニ仕タリケルヲヤ御尤メ有ケン」との記述があることと、神に対して寂阿が「大ニ腹ヲ立テ」「アザ笑テ」という態度をとつたこととで予想されたものであつた。

小貳・大友は「今度ノ振舞人ニ非ズト天下ノ人ニ被_レ譏ナガラ、暗知ズシテ世間ノ様ヲ聞居」たが、「五月七日兩六波羅已ニ被_レ責落_レテ、千葉屋ノ寄手モ悉南都ヘ引退シヌ」と聞いて「仰天」した小貳は、「我レ探題ヲ奉_レ討身ノ咎ヲ遁バヤ」と考へ、菊池武重と大友とに使者を送る。菊池は「先ニ懲テ」聞こうとはしなかつたが、

大友は「我モ咎アル身ナレバ、角テヤ助カル」と承諾した。

探題が「事の實否ヲ伺見ヨ」と派遣した長岡六郎が「小貳入道が子息筑後新小貳」に、「マサナキ人々ノ謀反ノ企哉」と斬り懸かり、遂に討たれたことで、小貳入道は「サテハ我が謀反ノ企、早探題ニ被_レ知テゲリ。今ハ休事ヲ得ヌ所也」と、大友とともに七千余騎で、五月二十五日午刻に探題館へ押し寄せた。探題側には離反者が続出し、英時は自害、一族郎從三百四十人も腹を切った。

ただ、この結末については、白居易の詩が引用され、「哀哉、昨日ハ小貳・大友、英時ニ順テ菊池ヲ討、今日ハ又小貳・大友、官軍ニ属シテ英時ヲ討」と、小貳・大友への批判的視線が窺える。

長門探題北条時直の動向が語られるのが第六章である。六波羅に加勢するため「大船百餘艘」で上京しようとした時直は、「周防ノ鳴渡」で「京モ鎌倉モ早皆源氏ノ為ニ被_レ滅テ、天下悉王化ニ順ヌ」と聞き、「九州ノ探題ト一所ニ成シ」と筑紫に向かう。ところが、赤間関で「筑紫ノ探題英時モ、昨日早小貳・大友ガ為ニ被_レ亡テ、九國ニ嶋悉公家ノタスケト成ヌ」と聞いたことで、心替りする兵も続出し、「僅ニ五十餘人」となつて「柳浦ノ浪ニ漂泊ス」という有様。時直は「小貳・嶋津が許へ、降人ニ可_レ成由」を伝えた。

笠置合戦の時、筑前に配流となつていた「峯ノ僧正俊雅」は「今一時ニ運ヲ開テ、國人皆其左右ニ慎ミ随フ」立場にあり、「九州ノ成敗、勅許以前ハ暫此僧正ノ計ヒニ在」つたため、小貳・嶋津は、時直を同道して降参のことを伝えた。「膝行頓首シ」「平伏」する時

直を見た俊雅は、同情の涙を流し、助命を約す。やがて、勅免によつて「懸命ノ地」の安堵も受けた時直は「無_レ甲斐ニ命ヲ扶テ、嘲ヲ萬人ノ指頭ニ受トイヘドモ、時ヲ一家ノ再興」に待っていたが、間もなく病死してしまつた。

「京都ノ合戦ノ最中、北國ノ蜂起ヲ鎮メン為ニ越前ノ國ニ下テ、大野郡牛原」にいた淡河右京亮時治一族の悲劇的な最後が描かれるのが第七章である。六波羅没落の報とともに「相順タル國ノ勢共、片時ノ程ニ落失テ、妻子從類ノ外ハ事問人モ無」い状態の時治に対して、平泉寺衆徒が「折ヲ得テ、彼跡ヲ申賜ラン為ニ、自國・他國ノ軍勢ヲ相語ヒ、七千餘騎ヲ率シテ、五月十二日ノ白晝ニ」牛原へ押し寄せた。

「敵ノ勢ノ雲霞ノ如ナルヲ見テ、戦共幾程カ可_レ忖」と判断した時治は妻に「御事ハ女性ニテヲワスレバ、縦ヒ敵角ト知トモ命ヲ失ヒ奉ルマデノ事ハ非ジ。サテモ此世ニ在存ヘ給ハバ、如何ナル人ニモ相馴テ、憂ヲ慰ム便ニ付可_レ給」と告げる。妻は「最ト恨テ」「同ハ思フ人ト共ニハカク成テ、埋レン苔ノ下マデモ、同穴ノ契ヲ忘ジ」と述べ「泪ノ床ニ臥沈」んだ。

結局、妻と二人の幼児とは乳母達とともに河に身を投げる。時治も「自害シテ一堆ノ灰ト」成つたが、章の末尾には「隔生則忘トハ申ナガラ又一念五百生、繋念無量劫ノ業ナレバ、奈利八萬ノ底マデモ、同ジ思ノ炎ト成テ焦給フランド、哀也ケル事共也」との同情的言辞が付けられている。

第八章は、越中守護一族の最後と後日譚から成る。越中守護名越遠江守時有と弟の修理亮有公と甥の兵庫助貞持とは、出羽・越後の宮方の上洛を阻止するために、「越中ノ一塚」に陣取っていた。ところが、六波羅の没落と「東國ニモ軍起テ、已ニ鎌倉へ寄ケル」との報によって、「只今マデ馳集ツル能登・越中ノ兵共、放生津ニ引退テ却テ守護ノ陣へ押寄シ」という状況になり、残った者は七十九人になってしまった。

「五月十七日ノ午刻ニ敵既ニ一萬餘騎ニテ寄ル」と聞き、時有達は「敵ノ近付ヌ前ニ女性・少キ人々ヲバ舟ニ乗テ澳ニ沈メ、我身ハ城ノ内ニテ自害ヲセン」と決める。「偕老ノ契ヲ結デ今年二十一年」の時有の妻には、九歳と七歳の男児があった。「相馴テ已ニ三年ニ餘ケル」有公の妻は「只ナラヌ身ニ成テ、早月比過」ぎていた。貞持の妻は「此四五日前ニ、京ヨリ迎ヘタリケル上臈女房」であった。この女房達と子供とは海に身を投げ、城に残った者達は「同時ニ腹ヲ搔切テ、兵火ノ底ニ」焼死した。

ところが、「近比越後ヨリ上ル舟人」が、この浦を通りかかり、沖に碇をおろしたところ、まず「遙ノ澳ニ女ノ聲シテ泣悲ム音」がし、次いで汀の方で男の声がした。渚に舟を寄せたところ、「最清ゲナル男三人」が「アノ澳マデ便船申サン」と舟に乗った。沖まで漕ぎ出して、舟を停めると、三人の男は舟から下りて「漫々タル浪ノ上」に立った。暫くして、浪の底から三人の女性が浮かび出て「其事トナク泣シホレタル様」を見せた。男達が近付こうとすると

「猛火俄ニ燃出テ」炎が男女の中を隔てたため、「三人の女房ハ、イモセノ山ノ中々ニ、思焦レタル体ニテ、浪ノ底ニ沈」んだ。男達は「泣々浪ノ上ヲ游歸テ、一塚ノ方へ」歩み行こうとした。「餘ノ不思議サニ」船頭が男の袖を捉えて誰何すると、男達は「我等ハ名越遠江守・同修理亮・并兵庫助」と名乗り、「カキ消様ニ」姿を消したのであった。

この後日譚については、「天竺ノ術婆伽」「我朝ノ宇治ノ橋姫」の例を引いた上で、「親リスル事ノ、ウツ、ニ見ヘタリケル亡念ノ程コソ罪深ケレ」と記される。

第九章は、巻九末尾の第十章に連接する内容を持つ。「京洛已ニ靜マリヌトイヘ共、金剛山ヨリ引返シタル平氏共、猶南都ニ留テ、帝都ヲ貢ントスル」噂があったため、中院定平を大将とする五万余騎を大和路へ、楠正成に二万余騎を添えた勢を搦手として河内国から、それぞれ派遣された。

「今一度手痛キ合戦アラシ」と思われた「南都ニ引籠ル平氏ノ軍兵」五万余騎は、「イツシカ小水ノ魚ノ沫ニ吻ク体ニ成テ、徒ニ日ヲ送ケル間」に、「宇都宮・紀清兩黨七百餘騎」が「綸旨ヲ給テ上洛」したのをはじめとして、「百騎ニ百騎、五騎十騎、我先ニト降参シ」たため、残留する平氏（幕府軍）は僅かになってしまった。

阿曾時治ら「宗トノ平氏十三人」と、二階堂道蘊ら「關東權勢ノ侍五十餘人」は、般若寺で出家し、降人になった。中院定平は「是ヲ請取テ、高手小手ニ誡メ、傳馬ノ鞍坪ニ縛屈メテ、數萬ノ官

軍ノ前々ヲ追立サセ、白晝ニ」帰京した。そして、「囚人」の「黑衣ヲ脱セ、法名ヲ元ノ名ニ改テ、一人ヅ・大名ニ預」けた。「七月九日」阿曾彈正少弼・大佛右馬助・江馬遠江守・佐介安藝守・并長崎四郎左衛門、彼此十五人」が、阿弥陀峯において斬られた。二階堂道蘊は「朝敵ノ最一、武家ノ輔佐タリシカ共、賢才ノ譽、兼テヨリ數聞ニ達」していたため、「召仕ルベシ」として、「死罪一等ヲ許サレ、懸命ノ地ニ安堵」となったものの、「又隠謀ノ企有トテ、同年ノ秋ノ季ニ、終ニ死刑」となった。

佐介左京亮貞俊は、重用されなかったことで北条高時に「恨ヲ含ミ憤ヲ抱キナガラ」金剛山攻撃軍の中にいたところ、千種忠顕より「綸旨ヲ申與ヘテ、御方ニ可_レ參由」の連絡を受けたため、「去五月ノ初ニ千葉屋ヨリ降參シテ」京都に出て来ていた。やがて召し捕られた貞俊は、「最期ノ十念勸ケル聖」に託して「年來身ヲ放タザリケル腰ノ刀ヲ、預人ノ許ヨリ乞出シテ、故郷ノ妻子ノ許ヘ」送ることにした。聖が了承すると貞俊は非常に喜び、一首の和歌「皆人ノ世ニ有時ハ數ナラデ憂ニハモレヌ我身也ケリ」を詠み、「閑ニ」首を打たせた。聖は鎌倉まで下り、ようやく貞俊の妻を尋ね出して、形見の刀と貞俊が最期のとき着ていた小袖とを手渡した。すると、貞俊の妻は「只涙ノ床ニ臥沈テ、悲ニ堪兼タル氣色」だったが、形見の小袖の襟に「誰見ヨト信ヲ人ノ留メケン堪テ有ベキ命ナラヌニ」と書き付け、その小袖を引きかぶり、形見の刀を胸に突き立てて、死んでしまった。

そのほか、夫に死別した妻や、子に先立たれた老母達も、自ら命

を絶ったのであった。

以下、北条氏滅亡に関する、やや長文の評語が付けられて、この章及び巻十一が終わる。

二

巻七において隠岐から脱出し伯耆の船上山に拠った後醍醐天皇の都への還幸を縦糸とし、巻九・巻十に分けて記された六波羅と鎌倉との滅亡の余震とも言うべき地方の状況を横糸として、織り上げられていくのが巻十一である。

巻十末尾の鎌倉幕府滅亡は「元弘三年五月二十二日」であった。従って、幕府滅亡後の状況を描く巻十一第一章は、空間的にも時間的にも巻十の巻末に連接するものである。後醍醐天皇の動向を記す第二章・第三章・第四章のうち、第二章は、巻九における六波羅没落の報を受けるところから始まっており、第三章において巻十に接続する。そして、第五章・第六章・第七章・第八章は、巻九・巻十の縮小版とも言うべき「地方」の状況が記述される。

第二章において、勘解由次官藤原光守の主張した還幸についての慎重論は、後醍醐帝の自主的な占いによって否定されるが、光守の懸念が現実解消されるのは第九章となる。なお、笠置山（巻三）以来、顕著さを増した後醍醐帝の自律的姿勢^(注6)は、隠岐脱出を経て確固たるものとなった。第三章で、兵庫に参向した赤松入道父子四人に対して、帝は「天下草創ノ功偏ニ汝等最員ノ忠戰ニヨレリ。恩賞

ハ各望ニ可任」と伝え、「禁門ノ警固ニ奉侍」させた。又、北条追討を注進した新田義貞からの使者三人に対しては「恩賞ハ宜依請」と宣下し、「勲功ノ賞」を与えた。ただ、赤松入道に対しての「恩賞」が、右の言葉通りのものでなかったため、赤松円心が「俄ニ心替シテ、朝敵ト成」った事については、巻十二で語られることとなる。

第四章でその参向が記される楠正成の場合は、帝が「御簾ヲ高く捲セテ、正成ヲ近ク被召、『大儀早速ノ功、偏ニ汝ガ忠戦ニアリ』ト感ジ被仰」たのに対し、「是君ノ聖文神武ノ徳ニ不依バ、微臣爭カ尺寸ノ謀ヲ以テ、強敵ノ困ヲ可出候乎」と述べて「功ヲ辞シテ謙下」した。そして、正成は、帝の兵庫出立の日から「前陣ヲ奉テ、畿内ノ勢ヲ相順へ、七千餘騎ニテ前騎」した。

治部卿と左馬頭とに任せられた足利高氏と直義とが、還幸の行列の「後乗ニ順テ、百官ノ後ニ」従ったのは、「尚非常ヲ愼ム最中ナレバ」として「帶劔ノ役ニテ、輦ノ前ニ」供奉した千種忠顕などから見て、高氏・直義への警戒心が払拭されていない事を示していると見る事もできる。一方、「此外正成・長年・圓心・結城・長沼・塩冶已下諸國ノ大名ハ、五百騎・三百騎、其旗ノ次ニ一勢々々引分テ、輦略ヲ中ニシテ、閑ニ小路打タリ」とあるように、「見物ノ貴賤岐ニ滿テ、只帝徳ヲ頌シ奉聲、洋々トシテ耳ニ盈リ」という華やかさの中にあつて、帝の言葉にも拘らず、楠正成や赤松円心の存在が、それほど大きいものと見られなかった側面をも示している。

ところで、第五章で「綸旨ニ錦ノ御旗ヲ副テ」拝領しながら、菊池との同盟を拒否していた少貳と大友のうち、少貳は「五月七日兩六波羅已ニ被責落」テ、千葉屋ノ寄手モ悉南都へ引退ヌ」と聞き「探題ヲ奉射身ノ咎ヲ遁バヤ」と考え、小貳からの連絡を受けた大友は、小貳と組む事で「角テヤ助カルト堅領掌シ」たのであつた。第六章の北条時直は、六波羅に加勢すべく上洛する途中で「京モ鎌倉モ早皆源氏ノ為ニ被滅テ、天下悉王化ニ順ヌ」と聞き、九州へと進路を変更した。

第七章の淡河時治は、「北國ノ蜂起ヲ鎮メン為ニ」越前に下つて牛原にいた時に「六波羅没落ノ由」を聞いたが、それと同時に「相順タル國ノ勢共」が「片時ノ程ニ落失テ、妻子從類ノ外ハ事間人モ無」くなり、平泉寺衆徒の攻撃を受け、自害へと追い込まれて行った。

第八章の名越時有達は、北陸道を防備し越中の二塚で「近國ノ勢共」を召集したところ、「六波羅已ニ被責落」テ後、東國ニモ軍起テ、已ニ鎌倉へ寄ケルナンド、様々ニ聞へ」たため、「催促ニ順テ、只今マデ馳集ツル能登・越中ノ兵共」は「放生津ニ引退テ却テ守護ノ陣ハ押寄シ」とし、「今マデ身代命ニ代ラント、義ヲ存ジ忠ヲ致シツル郎從」は「時ノ間ニ落失テ、剩敵軍ニ加リ」、「朝ニ來リ暮ニ往テ、交ヲ結ビ情ヲ深セシ朋友」も「忽ニ心變ジテ、却テ害心ヲ插ム」という情勢の急変の中で、一族全員が最期を遂げた。

卷十においては、(鎌倉殿(北条高時)ノ御屋形)が幕府方武士の注目の対象であり、その炎上によって武士達は死への覚悟を堅め

た。卷十一に描かれる幕府方の「地方」の武士達は、(六波羅没落)〈鎌倉滅亡〉という情報によって、孤立化させられ、死へと追いやられていく。

卷九では、六波羅から鎌倉へと差し伸ばされた手が断ち切られる形で、探題北条仲時以下が近江番場において自害をした。^(注8) 卷十では、徐々に輪を狭めていく形で北条高時以下が自害し、「平家九代ノ繁昌一時ニ滅亡」という結末を迎えたのであった。卷十の巻末に、対句として記されている「源氏多年ノ蟄懷一朝ニ開クル事ヲ得タリ」という一文は、新田勢の攻撃による源氏方の鎌倉制圧のみを述べるのではなく、「平家九代ノ繁昌」に代るものの登場、つまり主役の交代をも予告している。そして、卷十一では、主役たる後醍醐帝の再登場が、時間を追って描かれている。ただ、京都に還幸する後醍醐帝の周りに、ふくれあがる形で加わっていく勢力の事を記しつつも、その末端部分に含まれていくのが、小式・大友のような氏名を明記された武士達だけでなく、北条時直の船団から「イツシカ頼テ心替シテ、己ガ様々ニ落行ケル」人々や、淡河時直を死へと追い詰める「平泉寺ノ衆徒」や、名越時直達に対して「忽ニ心變ジテ、却テ害心ヲ插ム」人々でもあった事を、作品は語っている。

六波羅と鎌倉という二つの中心点を失った状況の下で、地方の北条方勢力が反攻するためには、その象徴となるべき人物の存在と勢力の結果が必要であるが、北条時直や名越時直達は、むしろ切り捨てられる形で死んで行くしかなかった。もっとも、彼等の死については(第九章の「佐介左京亮貞俊」の場合も)、女性や幼児を登場

させる事によって、哀話として同情的に描かれてはいる。

そして、第九章末尾に、次のような締め括りの文章が掲げられる。承久ヨリ以來、平氏世ヲ執テ九代、曆數已ニ百六十餘年ニ及ヌレバ、一類天下ニハビコリテ、威ヲ振ヒ勢ヒヲ專ニセル所々ノ探題、國々の守護、其名ヲ舉テ天下ニ有者已ニ八百人ニ餘リヌ。況其家々ノ郎從タル者幾萬億ト云數ヲ不知。去バ縱六波羅コソ輒被責落共、筑紫ト鎌倉ヲバ十年・二十年ニモ被退治事難トコソ覺シニ、六十餘州悉符ヲ合タル如ク、同時ニ軍起テ、纔ニ四十三日ノ中ニ皆滅ビヌル業報ノ程コソ不思議ナレ。愚哉關東ノ勇士久天下ヲ保チ、威ヲ遍海内ニ覆シカドモ、國を治ル心無リシカバ、堅甲利兵、徒ニ挺楚ノ為ニ被摧テ、滅亡ヲ瞬目ノ中ニ得タル事、驕レル者ハ失シ儉ナル者ハ存ス。古ヘヨリ今ニ至マデ是アリ。此裏ニ向テ頭ヲ回ス人、天道ハ盈テルヲ缺事ヲ不知シテ、猶人ノ欲心ノ厭コトナキニ溺ル。豈不迷乎。

これは、卷九・卷十に分けて語られてきた「中央」情勢に、卷十一の「地方」状況をも加えた上での総決算としての評語であり、卷一以来「見人眉ヲ顰メ、聽人唇ヲ翻ス」と描写された北条高時に象徴される「驕レル者」の滅亡を纏めた一文として、作品展開上の一つの完結を示している。^(注9)

ここで、北条氏が短期間に滅亡した事を「業報」として「不思議ナレ」と捉えられている点には、作品としての歴史解釈の一視点を窺う事ができようし、卷十二から展開していく後醍醐帝の(公家一統の政治)の中にも「驕レル者」や「天道ハ盈テルヲ缺事」を知ら

ない人や「欲心」を持つ人間が現れた場合には、決して安泰ではない、という客観的な歴史観をも見ることができであろう。そして、「公家一統の政治」に問題が生じる事があれば、「平家」に代わる主役としての「源氏」が、「公家」と拮抗する存在となつて、クロージアップされてくる事になる。

注

- (1) 巻四以後「先帝」と称された後醍醐帝であるが、巻七「先帝船上臨幸事」以後、「主上」と記されている。
- (2) 引用は日本古典文学大系本(岩波書店)による。
- (3) この章の中で、「大伴」と「大友」とが呼称として混在しているが、引用文は、そのままとした。
- (4) ここに引用されている人名のうち、「阿曾彈正少弼時治」については、巻十で北条高時とともに自害した人名の中に「阿曾彈正少弼時」なる人物が見られ、大系本巻十の頭注は、それを「左近大夫将監時治」とする。「大佛右馬助貞直」は、巻十で「大佛陸奥守貞直」が討死しているため、ここは「高直」の誤りと思われる。「江馬遠江守」についても、同じく巻十で自害する中に「江馬遠江守公篤」の自害が記されているために、ここは別人かと考えられる。
- (5) 史実としては、翌建武元年(一三三四)三月二十一日。
- (6) 巻二と巻三における後醍醐天皇像の違いについては、拙著『太平記の説話文学的研究』第二章参照。

- (7) この事については、拙稿「鎌倉幕府の崩壊——『太平記』巻十の構成と展開——」(『大阪樟蔭女子大学論集』30)参照。
- (8) 拙稿「足利高氏の役割——『太平記』巻九の構成と展開——」(『樟蔭国文学』29)参照。

- (9) 巻末の文は諸本に共通して見られるものである。ただ、各章においても、人名などで異文を載せる天正本は、右に引用した末文に続けて、高野山に出家遁世した工藤新左衛門入道が鎌倉に下向し「御屋形の旧跡」に落涙、詠歌の後「散聖ノ道人」となったとの記事を載せ、他の諸本とは異なった締め括り方をしている。